

# 心理学における自動性について

右田晃一 (Terukazu Migita)

大阪大学人間科学研究科科学哲学研究室博士前期課程

自動性(automaticity)とは、James(1890)など心理学成立の初期から言及されていた概念であるが、現在の心理学においてもコンセンサスを得ていない概念であるとされる(Moors and De Houwer, 2006)。しかしそれは、心理学の基礎的で心的現象の入り口になる知覚の領域だけでなく、記憶(Jacoby, 2001)、社会的認知(Wegner & Bargh, 1998)、学習(Cleeremans & Jiménez, 2002)、感情(Scherer, 1993)、動機付け(Carver & Scheier, 2002)など、幅広い心的現象や心的過程に基づく行動の説明に適用される、現代の心理学において重要な概念である。それは、伝統的に人間の行動は自由意志や熟慮に基づいたものとみなされ、そういった考えが理性的で自己統制的な人間像を形作っているからであり、自動性が持つ無意識性や非統制可能性などはこういった人間像からの転換を迫るものであるからである。特に、定量的で実験的な手法で示された結果としてのそれはフロイトなどによって唱えられた精神分析的な無意識とは異なる。実際、上に挙げた心理学者のWegnerはその著書 *The Illusions of Conscious Will* (2002)において、意識的な自由意志を否定する過激ともいえる主張を行っている。

しかしながら、上述のBarghは無意識と自動性における実験手法の公開を拒むなど、近年、再現性の危うさが問題となっている。そうなると、心理学におけるこの概念を用いた人間行動の説明は無条件に信用していいものではないであろう。

しかし、こういった事情はなくとも、自動性とはそもそも我々人間の行動を説明することにおいて有効・妥当な概念なのであろうか。自動性に関して、Moors & De Houwer (2006)で構成要素の相互関係が論じられており、また、Moors(2016)で自動性の因果的・メカニズム的説明が考えられている。しかしながら、それは、哲学理論の因果性とどう関わるのか。また、この時想定されるメカニズムとは何か。更に、それらによる説明は心の哲学や心理学の哲学において重要な問題となる素朴心理学(folk psychology)における人間行動の説明とはいかなる関係にあるのかを本発表では論じる。

まず、自動性について Moors & De Hower (2006) が行っている理論的・概念的分析を簡潔にまとめよう。意識的な行動の説明に用いられる注意(attention)と自動性との関連の歴史的な理論の変遷に気を配りながら、自動性の主な特徴として彼女らが一方で考えるのが目標関連的(goal-related)な要素である。これには、(非)意図性、目標志向性、目標(非)依存性、(非)被統制性/(非)統制可能性、自律性(autonomy)が割り振られる。他方で、純粋に刺激駆動的 (purely stimulus driven) な要素にも非意図性の特徴を割り振っている。そして、当該論文では他の論者によって主な特徴とされることある(無)意識性、(非)効率性、(非)迅速性、についての分析が続く。

本発表で重要なのは、これらの特徴間の関係の分析もさることながら、これらの特

徴に基づく心理学的な行動の説明と哲学における命題的態度などによる行動の説明との関係性の問題である。意図性は上述の論文で被統制性/統制可能性として鍵となる概念であると述べられる。しかし、伝統的な哲学では、意図的行為は意図、行動、意図と行動の因果的連関として論じられる。果たして、意図性に関する見解において、両者は対立関係、またはお互いに整合性のある関係にあるのであろうか。

発表では次に、Moors (2016)で行った、自動性の因果的・メカニズム的説明の分析の検証を行う。すなわち、MoorsはLogan(1988)の自動性に関する理論 (single-step memory retrieval) の記述のうち、反復(repetition)と頻度(frequency)が説明項となって因果的な説明を与えるとしているが、それは因果理論が多数ある現在でどのような理論的根拠を持っているのだろうか。また、因果理論にも関わる科学的説明に関する理論と整合性は保たれているのか。因果理論と科学的説明理論に関して概略を説明しながら、また、心理学的説明という議論にも触れながら、この自動性の因果的説明について論考を行う。

最後に、Moors(2016)は前述のLoganの議論に依拠しながら非自動的過程から自動的過程への移行、つまり自動性の過程を更に下位のレベルの過程に分解することをメカニズム的説明としている。しかしながら、科学哲学においても、Machamer, Darden, and Craver (2000) やそれに基づくWoodward (2002) の論考など、メカニズムに関する議論が蓄積している。そこで、本発表では、Moorsにおける説明を考えるにあたって、科学哲学的議論における説明と比較を行う。そして、Bechtel

(2008) の *mental mechanism* を中心に心的なメカニズムとは何であるのかを心理学の哲学の他の文献も参照しながら論じる。以上のような分析と議論を通じて心理学の再現性の問題について言及できるのではないか。